転生したらCHaserだった件（仮）

著：伊倉隆

～ プロローグ～

僕の名前は、あるき。小学6年生。

今僕がいるのは、上越妙高駅の裏にあるJM-DAWN。

みんなが作ったプログラム同士で対戦できるCHaser(チェイサー)っていうのがあって、その大会が今ここで開催されているんだ。

プログラムなんて全然分からなかったけど、6月から2週間に一度、ここのスタジオで開催されているCHaserのプログラミング教室で勉強して、自分だけのCHaserを作れるようになったんだ。

おかげで、今年の夏休みは、ほとんどプログラミングに使っちゃった。

なのに、今日は決勝戦で負けてしまって、すごくがっかり。

次は負けない！

プログラムが入ったメモリーカードを握りしめて、心の中で誓った。

壁にかかっている時計を見て、お母さんが迎えに来るまでずいぶん時間があることが分かった。

「よし！次回に向けて改良だ！」

膝の上でノートパソコンを開き、ソースコードを修正していく。

：

：

ここをこうして、こうすれば。

これでいいはず。

よし、模擬戦だ！

：

：

あれ？ブロックが目の前に置かれたら、そこに突っ込んで負けちゃった。

うーん、相手の行動に対して柔軟に動ければいいんだけどなぁ。

とりあえずコメントを書いて後で直すことにしよっと。

コメントは＃をまず書いて、

「#あとで直すこと！」

よし！

CtrlとCのショートカットで保存して、メモリーカードに移してと。

メモリーカードを抜いて握りしめ、ノートパソコンを閉じた。

「あるき君、お疲れ様」

見上げると眼鏡をかけた短髪の男の人がいた。

名前は、確か、、、

名前を思いだそうとしている間に、男の人が話し出した。

「あるき君、残念だったね。試合」

「うん、負けちゃった。もう少しだったのになぁ」

「でもいい試合だったよ」

「次は頑張ろうね」

「うん！」

「そうだ」と言い、男は顔の前で手をたたき、

「僕ね、CHaserでゲームを作ってみたんだよ、遊んでみる？」

「CHaserでゲーム？」

CHaserはゲームなのに、まだゲーム？

？が乱舞する中、好奇心が勝った。

「うん、遊んでみる！」

キラキラとした目を見て男は目を細めて破顔する。

ここに来ると色々なものがあって楽しい。

eスポーツのゲームやスイッチ、プレステ4にVR、MetaQuestもあったっけ。

ここが僕の部屋だったらなぁといつも思う。

特にVR系が好きだ、思いっきり走り回れるし。

でもVR酔いっていうのかな。

あれさえなければ最高なんだけど。

「じゃあ、こっちの部屋に来て」

「うん」

元居た廊下を進み、フリースペースをまたいだ先には、部屋が４つあって色んな会社が入っている。

何度も講習会に参加してるから、よく知っている。

1つ目は、東京に本社を構えるIT企業、OUTSIDE LAB（アウトサイトラボ）さん

2つ目は、SO-Bと書かれた部屋。

ここはいつもカーテンがかかっていて中が見れないようになっているんだ。

何の部屋なんだろう？

3つ目は、新潟市が本社の、ABCPalette（ABCパレット）さん。印刷屋さんだって聞いてる。

最後の4つ目は、JM-DAWNを運営している丸互さん。ワイシャツを着た暇そうなおじいちゃん達が良く出入りしている。

そういえば、このお兄さんは丸互の人だったような気がする。

「こっちに来て」と促されたのは、いつも見えなくなっている左から２番目の部屋。

SO-Bと書かれている。

今日も相変わらず中が見えない。

カードキーをかざすと、プシューっと空気が漏れるような音がして、扉が少し浮かび上がり音もなくスライドした。

「さ、入って」

「わぁ、初めて入る」

前から気になっていた部屋で、気持ちがはやる。

「なんかドキドキする。」

部屋の中は薄暗い。ベットがあり、その上にヘッドマウントディスプレイが置いてあるのがかろうじて見える

中は予想に反して質素だ。

「なーんだ、おもしろいものがなんにも無いや」

がっくりと肩を落としていると、背後から「わーー」という歓声が聞こえてきた。

そろそろ、大人の部が始まったころかな？

そう思って振り返った時、音もなく扉がスライドし、プシューと音を立てて、閉まった。

その瞬間、歓声は聞こえなくなり、コーというエアコンの低い唸り音と自分たちの動く音しか聞こえなくなった。

普段なら怖いけど、謎の部屋に入れたうれしさと、新しいゲームで遊べる楽しさで、すごくドキドキしている。

耳元でドッドッドッと音がして、周りに聞こえているんじゃないかと心配になる

少し苦しくなって、息をしていなかった事に気が付いた。

鼻から息を吸うと、どこかで嗅いだような匂いがした。

普段の生活では嗅ぐことのない匂い。

でもどこかで嗅いだことのあるような。

そうだ。これは、パソコンのカバーを開けた時の匂いだ。

新しく買ってもらったノートパソコンを開けた時にもこんな匂いがした。

僕はこの匂いが好きだ。

電子パーツの匂いというか、精密機器の匂いというか、言い表せないけど、テクノロジーの匂いだ。

「さぁ、ベットに横になっ、、、」と言いかけ、

“そうだった” という顔をして、何も言わず僕を抱えてベットに寝かせてくれた。

「じゃあこれを付けて」

ベットの上に置いてあったディスプレイを渡された。

「これは何？」

「発売されたばかりのやつだよ、昨日ポチって今朝アマゾンで届いたんだ。」

「最近は何でもすぐに届いて便利な世の中になったよね」

「僕が君くらいの年のころにMSXっていうゲーム機があってね」

「雑誌にフロッピーディスクが付いてきて、それで遊ぶんだ。」

「それが楽しくて。あ。まものクエストってのがあってね、、、」

：

：

そうだった、この人は一度話すと長いんだ。うんちくが好きというか、なんだかオタクっぽい。

面白いのかつまらないのかよく分からない話を聞いていると、だんだん眠くなってきた。

サッとディスプレイを装着されてスイッチが入る。

「そうそう、これ落ちてたよ」

渡されたのは、プログラムを保存したメモリカードだ。

手に持っていたはずなのに、いつの間に落ちたんだろう？

「しっかり持ってないとね」

ポンとメモリーカードを渡された。

女性のアナウンスが流れ、ゲーム起動がする。

ようこそナーブギアへ

CHaserGame2 起動します

暗闇からゆっくりとタイトルが現れる。

CHaserGame2

タイトルが表示された後は、何かのデータが読み込まれているようなバーのエフェクトが見える。

にしてもバーの進みが遅い。

98%、あと少し、、、99%

もう少し！

：

99%から動かない。。。なんで？

それを眺めていたら、余計に眠くなってきた。

100%

Hello!! CHaser Game.

LINK START!!!

そのころにはすでに意識が遠のいていた。

：

う、うーん。ふああ、寝ちゃったのか。

あ、あれ！？ここどこ！？

暗くてよく見えない。

確かベットで横になって。

これまでの事を頭の中で思い出す。

あれ？手に持っていたメモリーカードが無い！たしかプログラムをセーブして手に持っていたはずなのに！

ん？なんだ体が青白く光り出したぞ。

音も無くどこかから線が現れ、目の前でグルグルと回り、折り重なり、交じり合い、瞬く間にゴーグルとタブレットが形成されて目の前に現れた。

なんだこれ！？

驚きのあまり少し身を引いたが、冷たく重い何かが背後にあるのを感じた。

振り返ると、壁？よく見ると左右には何もなく、四角いブロックだということが分かった。

しかたなく壁にもたれかかる。

火照った体に壁の冷たさが気持ちいい。

壁はだんだんと自分の体温で温まってきて、自分と壁との境界線が無くなる。

大きいものに守られているような気がして安心してきた。

「よし！」

決心してタブレットを手に取り、ゴーグルをのぞいてみた。

なんだこれ？マップ？

ほとんど「？」で埋め尽くされているけど、真ん中に青く「Ｃ」が書いてあってその下の方には「＃」上には「＄」

カレンダー

自動的に生成された説明

ゴーグルは半透明で、うっすらと先が見える。

ゴーグルとタブレットを手に持ったことで、それまで見えていなかったその先が見えるようになった。

宙に浮かぶキラキラした宝石のような物が見えた。

なんだこれ？

前に歩き、手に取ってみる。

あれ？僕、歩いてる？

そう思った瞬間、手に持った宝石が弾けた。

弾けた時にできた欠片同士がぶつかり合い、微かにガラス同士がこすれ合う音と、細かい破片に当たった光がキラキラと乱反射する。

その時、ゴウンという音と共に、微かな風が吹き、キラキラした細かいガラスのような破片が宙に舞い暗闇に消えていった。

「あっ」

その瞬間、ゴウンという地響きのような低い音と共に背後に何か大きなプレッシャーのようなものを感じた。

振り返ると、壁だった。

触ってみると今度はヒンヤリと冷たい。

新しくここに現れたんだ。

パッとひらめきにも似た感覚が走る

宝石、壁、宝石を取ったら背後に壁、周りしか見えないマップ、

もしかしてここは

「CHaser！？」

※このあたりで、実際にCHaserGameで遊んでもらう

〜　最終決戦　〜

一本道を抜けた先でLookやSearchを何度か行ない、少し広い空間に出た事が分かった。

進む方向に向けてSEARCHしたところ、少し先にアイテムが並んでいるのが分かった。

さらに前進し、LOOKをすると、壁の間に道があり、その中にアイテムが並んでいるのが分かった。

また一本道だ。

けど、アイテムを取りに行ったら、自分の後ろに壁ができてしまい、戻れなくなる。

そんな所に入って、前にブロックを置かれたらアウトだ。

そう思った瞬間、暗闇が続く道の奥から、咆哮にも似た声が聞こえる。

「エターナルブリザーード！」

え、なになに？

急いでSEARCHをかける。

まっすぐこちらへ進むHOTの姿が確認できた。

やばいやばい、このままだとここに来ちゃう、どどど、どうしよう。

そうか！

エターナルブリーザードは壁を作りながら一直線に進むテクニックの一種だ！

講師でもじゃもじゃの。。。えーと、そう、もじゃもじゃ先生！

じゃなかった白石先生が言っていた！

タイミングを合わせてブロックをおけば。

勝てる！

ゴクリと唾をのむ。

タイミングを見計らうかのように、その場でSEARCHを繰り返す。

アイテムを取ることで発生する、壁のゴウン、ゴウンという音と共に相手が近づいてくるのが分かる。

まるで巨大なモンスターのような気がして、戦慄した。

その場でSEARCを繰り返し、その場にとどまっていたあるきの前に、暗闇から現れたのは、自分と同じ背格好の子供だ。そして赤い靄のようなものを身にまとっている。

一目でわかった。

HOTだ。

あるきと違うのは、ゴーグルとタブレットを持っていない事だけ。

大丈夫だ、安心しろ。

何もしなければ動かない。

そう何度も頭のなかで繰り返した。いや、もしかしたら言葉を出していたかもしれない。

恐る恐る最後のSEARCを行い、さらに間を詰める。

呼応するように相手が動いた。アイテムを取り、ゴウンという音と共に相手の後ろに壁が現れる。

壁が現れたことによる微かな風が、HOTが身にまとう赤い霧を揺らす。

それを見た瞬間、つい「やられる！」と思い、思わず身をかばってしまった！

ポチっ

「あ、しまっ、、、」

言い終わる前に、ゴウンという音と共に目の前に壁が現れる。

「うわああ、失敗した、失敗した、失敗した、失敗した、失敗した」

その時である。

壁の向こうから「ぐあああーーー」という咆哮と共に、

「アトデナオスコト」

という言葉が聞こえた。

「アトデナオスコト？」

そう思った瞬間、体が光に包まれ、まぶしさのあまり目をつぶった。

そのまま気を失った。

光が消え、元の殺風景な景色に戻る。

上空から光が消えた場所を一点に見つめるローブを纏った男の姿があった。深いフードを被り、表情は伺えない。

人差し指を動かし、メガネを上げる動作をしたが、メガネがない事に気がつき苦笑した。

手をかざすと、空間にいくつかのスイッチが現れた。

そのうちの1つを押し、そのまま言葉を発する。

「植木さん、終わりました。あるき君の勝利です」

「ですが、緊急でリザレクションをお願いします」

呼応するように、どこからともなく、男の声が聞こえる。

「うん、勝ったね。こっちのモニターでも確認済みだよ。」

「。。。え？リザレクション！？」

「あるき君、勝ったよね？」

ローブの男は何も反応しない。

「あー。。。」頭をかく音が聞こえ、ため息交じりで、

「I Copy」と返答。

どこかに指示をだす声が聞こえる。

「おい！リザレクションだ！」

少し間が空いて、指示を出した植木の方へ近づいてくる感じで聞こえる

「今ですか！？あ、いや、しかし、ここの電力だけでは。。。」

「いいから！リザレクションだって！！」

「魚民と大戸屋それにお土産屋。なんとかっていう居酒屋、とにかく全部回してもらって。ほら急いで！！！」

「ああ！ちょっとまて！」

「なぁ、80％でも大丈夫か？」

「60以上で大丈夫です。80なら99％です」

「助かる！」

「おい！魚民は外しておけ！ほら、さっさとやれ！」

声の後ろでバタバタする音が聞こえる

「まったく。。。」ため息に交じって吐き出した。

「とりあえずお疲れさん。ま、お疲れさん？は、あるき君だけどね」

「にしても、今回のデバイス、某アニメに出てくるあれでしょ？名前まんまじゃん。びっくり。まさか実在するなんてね…」

「あとさ、これ、あの子が負けてたらどうなったの？」

「・・・」ローブの男はニヤリとしたが答えない。

「え、なに？」

「ま、良いけどね。今回はリザレクションで済んだけど、クリーナーさんのお世話になるのだけはやめてね。あれめっちゃ高いから」

「あんたのとこの部長さん、坂田さんだっけ？ありゃ一体何者なんだい？こんな事までしてさ」

ローブの男は、やれやれと小さいため息をつき、面倒くさそうに答える。

「植木さん、これから打ち上げのあと東京でしょ？あっちは混んでますからね。ホームを歩くときは黄色い線の内側ですよ？」

「はいはい。ま、早く戻ってきてね。戻れなくなるよー」

ぷつりと会話が切れると、空間に広がっていたメニューが消えた。

空間全体や壁、キラキラしたアイテムがボロボロと細かい6角形のテクスチャとなり崩れ始める。

ローブの男が指を示すと、今度は別のメニューが現れた。

無駄のない手つきで操作した後に、LogOutのボタンが表示された。

ボタンを押した刹那、体が一筋の光になり、シュンと消え、細かな光が音も無く散らばり暗闇に消えた。

あるきはハッと目が覚めた。

「知らない天井だ」

ふと、そんなことを思った。

頭が回らず、しばらくボーっとしていた時にふと気が付いた。

あれ？僕、たしか、CHaserGameで勝って。。。

「はっ」と気が付き、膝を曲げようとしたが、力が入らず動かない。

「やっぱり」ため息と一緒に吐き出した。

「あるき、あるき！」

近づいてくる方向に顔を向けると、心配そうなお母さんの顔があった。

「もう、ゲームで遊んでる間に眠るなんて。」

「夜更かしのし過ぎ」

パチっとデコピンを食らった

部屋には母と、ゲームを作った男の人がいて、3人の笑い声が響く

お母さんの指は細くて、デコピンはまったく痛くはない。指がヒットした所をスリスリとさする。

「ごめんなさい」

「ほら帰るわよ」

「車いすに移って」

太ももの力を使って一本ずつ足を動かし、おしりをスライドさせて、なれた動作で、車いすに移動した。

母に車いすを押されて、部屋を出て、会場の横を通り過ぎる。

スタジオのガラス越しに色々な人がせわしなく片付けている様子が目に映る。

みんな笑顔だ。

寝ている間に、大会は終わってしまったようだ。

「あーあ、閉会式見たかったな」

「そうだ！エキシビジョンマッチ、どっち勝ったの？」

後ろについていた男の方に顔を向けて聞いた

「今回は残念ながら引き分け」

「システムトラブルがあってね、しばらく停電しちゃったんだ」

「みんなで頑張ったけどさすがに停電は復旧できなくてね、復旧したころには時間切れ」

「ふーん、そうなんだ」

つまらなそうな顔をして、エントランスの自動ドアを出る。

「お母さん、僕ひとりでエレベータ乗るよ」

「え？大丈夫？」

「来年から中学生だからね、これくらいできなくちゃ」

一瞬間があり、

「それもそうね。使い方わかる？」

「わかるよ！」

「夕飯は直江津のベニスよ」

「えー、大戸屋じゃないの？」

「なんか、電気がつかなくて今日はお休みなんだって」

えー、と口を3の字にとがらせて不満を漏らした

「ベニスのハンバーグは絶品よ～」

「え！ハンバーグ！やったー」

母から離れて、自らタイヤを回してエレベータに入り、くるんと回る

男がエレベーターのスイッチを押して、扉が閉まり始める。

お互い「ばいばい」と笑顔で手を振る中、扉がゴウンという音を立てて閉まる。

男は人差し指で眼鏡を上げて、ニヤリと笑みを浮かべて踵を返した。

後片付けが終わったスタッフがぞろぞろと、自動ドアから出てくる。

「いやー、盛り上がりましたねー」

「停電はびっくりしたけどね。」

「ははは」

「そいえば、打ち上げってどこでしたっけ？」

「ここ」

親指で指しながら答える

「魚民」

～ エピローグ ～

夜中、男の子は、机の上のＰＣを開き、メモリーカードを挿してプログラムの修正を始めた。

今日のCHaser大会の事が忘れられなくて、興奮してしまい、どうも寝付けない。

「えっと、どこ直すんだっけ」

記憶をたどり、修正したかった所に書いたコメントを思い出す。

「たしか、、、」

#あとで直すこと！

何かが引っ掛かり、反芻する

「あとで直すこと」

反芻する

「アトデナオスコト」

目の前に壁が出現した光景とゴウンという音が、頭の中で再生される。

「あーーーー！」

家中に少年の声が響きわたる。

つづく？

スペシャルサンクス

・しみず（プログラマー）

・ほんま（プログラマー）